

## 戦前の渋沢水産史研究室の活動に関する調査研究

### 水産史研究室と民具蒐集

——アチック同人の現地調査を追体験する——

研究代表者 加藤 幸治

戦前に日本の常民文化研究の先鞭をつけた渋沢敬三は、主宰するアチック・ミュージアム（以下、アチック）の研究の柱を、「民具蒐集」「漁業史研究」「文献索隠」と位置付けていた。研究活動をオーガナイズしていた渋沢敬三の意図のなかでは、上述の三つのアプローチは、常民文化研究へのアプローチであり、相互に関連し合っていたはずである。ただ、「漁業史研究」を担う渋沢水産史研究室と、「民具蒐集」や民具の研究を担う部会とは、どの程度まで協力関係があったのだろうか。

筆者は、毎週のように議論を重ねながら研究をかたちにしていった水産史研究室の同人たちは、地方文書の分析のみならず、民具を収集したり漁業の現況をフィールドワークしたりすることが、水産史を通じた常民文化の解明にも大きな補強材料となると承知していたのではないかと想像する。逆に、民具蒐集のための調査旅行であっても、漁民の文化が常民文化研究に重要な位置を占めることを、調査者は意識していたであろう。



写真1 国立民族学博物館での資料熟覧の様子

今年度の共同研究では、国立民族学博物館において水産史研究室にゆかりの深い人物名でアチック収集の民具を検索し、収集者ごとに民具を熟覧するという調査を行った。調査した民具は以下の通りである。

山口和雄収集民具 32 点・櫻田勝徳収集民具 71 点（ただし、山口と共同収集 14 件を含む）・進藤松司収集民具 18 点・佐藤三次郎収集民具 6 点・喜多村俊夫収集民具 5 点・渋沢敬三と宮本馨太郎収集民具一括資料 1 件（77 点）

これを念頭に、共同研究メンバーは、これらの同人らが彙報や研究ノートとしてアチックから成果を刊行したフィールドに出かけ、一群の民具の意味やその意図を探る調査を実施した。例えば、山口和雄は水産史研究室での調査研究に関連の深い漁具等を収集している。その一方で、櫻田勝徳の収集資料は、九州縦断調査旅行を再現できるような内容であり、必ずしも報告等とは連動していない。佐藤三次郎や進藤松司など、地元在住の在野の研究者は、体系的な意図はほとんどなく、身近な民具をアチックに送ったといった内容である。

この共同研究では、水産史研究室同人らの活動を復元しうる新資料の翻刻や年譜の作成を目標としているが、同時に既存のアチック関係資料の意味や資料同士の関係などについても、調査を継続していきたい。



写真 2 登別市幌別のかつての漁村部の現況



写真 3 氷見市灘浦の泊地区の漁港（撮影／磯本宏紀氏）